



討論会「雑×ローカル×しあわせ」報告

大岩 圭之助

2018年11月12日、共同研究「雑の研究」が企画した討論会「雑×ローカル×しあわせ」が行われた。これは、「ローカリゼーション」と「しあわせの経済」をめぐる国際的な議論と実践を日本に紹介、また日本各地の「ローカル経済」モデルを世界に発信することを目的に11月11～12日の二日間にわたって東京で開催された「しあわせの経済」世界フォーラムの分科会として開かれたもの。田中優子氏（江戸文化研究者、法政大学総長）と山崎亮氏（株式会社 studio-L 代表、東北芸術工科大学教授）をゲストに迎え、またコメンテーターとしてタイの教育者で思想家のプラチャー・フタヌワット氏を迎えた。

以下、①討論会冒頭の共同研究メンバーである大岩と高橋の発言、また②討論会末尾の出席者各氏による締めくくりの発言を再録することで、報告に代えたい。

①

大岩：今日は、「しあわせの経済」世界フォーラム2017の二日目です。今日は一日中、同時に三つずつくらいの分科会が開かれますが、「雑×ローカル×しあわせ」と銘打ったこの集いもその分科会の一つです。その狙いは、プログラムに書いてある通りなので、それを先に紹介しておきます。

——「雑」という概念の可能性を探求する共同研究「雑の研究」が主宰する雑談風の雑学トークショー。ゲストには、アカデミズムにとらわれない雑（間専門的でフレキシブル）なスピリットを誇る田中優子と山崎亮。「雑」にとっては苛酷な新自由主義とグローバル化の時代とは、同時に、「幸せ」が「豊かさ」の尻に敷かれ、「ローカル」が弱者と敗者の代名詞になった時代でもあった。そのグローバル化を超えることなしに、人類の未来がないということがますます明らかになりつつある今、いよいよ「雑なるモノゴト」（多様性、境界性、混合性、マイナー性、不合理性、計量不能性...etc.）の復権と知のブリコラージュによって、「懐かしい未来」をたぐり寄せる絶好の機会が訪れている！？

というわけで、今回は、高橋さんとぼくという共同研究の常連に加え、特に「雑」に通じていらっしゃると思われる二人のゲストのお話を聞きながら、「雑」を新しい視点から見ていきたいと思っています。ぼくとしてはそれがきっと、「ローカル」そして「しあわせ」という世界フォーラムの二つのキーワードに光を当てることにもなるだろう、と期待しているわけです。また世界フォーラムという国際的な場ですし、ここにも外国から来られている方々も参加されています。ぼくの友人で昨日の講演者の一人でもあるプラチャー・フタヌワットさんにも、そこで通訳を通じて話を聞いてもらっていて、できれば最後に一言、コメントをいただこうと思っています。「雑」の意味を日本語圏の外にどう伝えるかということも意識しながら、話を進めたいと思います。そうすること

で、「雑」についての議論に広がりや深みが出るのではないのでしょうか。

高橋：大岩さんの考える「雑」とぼくの考える「雑」は、重なっているところもありますが、違っているところもあります。ただ「雑」という考え方が今の時代にこそ、本当に必要ではないかという点では一致しています。この重なっているところと違うところが混在しているところ、それ自体が「雑」の「雑」たる所以であり、「雑」は、いろんなところから焦点化できる大きいテーマだと思うので、ゲストの皆さんの「雑」について語るのを聞きながら、それをさらに広げ、深めていきたいと思います。

②

大岩：さて、そろそろ座談会のまとめに入っていきたいと思います。まず、田中さん一言お願いします。

田中：「雑」をどうやって「しあわせ」とか「ローカル」に結び付けられればいいでしょうね。ヒントとして大きいと思ったのは、「秩序を保ちましょう」という言い方ではなくて、「もっとこういうおもしろい選択肢があるんじゃないですか」と提案していくことなのかな、と思いながら皆さんの話を聞いていました。自分の中で「雑」と「ローカル」と「しあわせ」を結びつけていくことをこれからも考えたいです。

大岩：山崎さんはいかがですか？

山崎：みなさんの話をお聞きしていて、「雑」にはいろんな価値があることを知りました。地域のコミュニティには、その雑さを受け入れながら生活していく叡智が宿っている気がします。これがグローバルになっていくと、雑多な情報までやりとりするとデータ量が大きすぎるので、単に数値が上がったとか下がったとか、何色なのかとか、限られた情報だけでやりとりせざるを得なくなる。そこには「雑」の入り込む余地がないような気がします。もし我々が多様な「雑」の価値を感じることができるとしたら、それはすなわち地域に根ざした活動だからこそ感じられるものなのだろうと思います。地域での対話や活動が「雑」とは逆のほうに進みそうであれば、誰かが「ちょっと待ってくれ」と言い始めるような状況を生み出したいものですね。

高橋：いろいろなものを考えてみても、生まれたときはみんな「雑」なんですよ。いろいろ説はあるんだけど、小説は十七～十八世紀くらいに生まれたらしいんです。何から生まれたかという、物語や詩、ゴシップ、それまでに生まれたさまざまな文化が混ざって生まれた。でも時が経つとどんどん純化されて「近代文学」という、美しいひとつの形、公認の形式となって、出生時の雑さを忘れてしまう。ぼくの大好きなジャズは、もういつ生まれたのかわからなくなってしまっています。アフリカ由来のもの、当時あった様々な音楽とを結びつけて、黒人ミュージシャンたちがつくり上げたものが、いつのまにか、大学で理論から教えることができるようなものになった。

(中略) だから「雑」だったことを忘れないよう、いつも、誕生のときはどうだったかって、戻ってみることが必要なんじゃないか。

(中略)

大岩：さて、最後にもうひとつ。今回の「しあわせの経済」世界フォーラムの発表者の一人であるタイのプラチャー・フタヌットさんに来ていただいています。特別に通訳の方に同時通訳をお願い



いして、ここまでの座談会をさいてもらったわけですが、できたらコメントをいただきたいと思うんですが、いかがでしょう。

プラチャー（訳：大岩）：そもそもなんでこのテーマを「しあわせの経済」世界フォーラムで話すことにしたのか、まだよくわからないところもあるんですが、勝手に解釈させてもらいますね。まず、「雑」の反対語は何でしょう。

大岩：いい質問ですね。この座談会でさっきから出ている言葉を英語で言えば、デュアリズム（二元論）、クラシフィケーション（分類化、階層化）、オーダーやコヒアランス（まとまり、秩序）、ユニフォーミティやモノカルチャー（均一性、均質性）、パワーやフォース（強さ、権力）それから、強きものへのコンフォーミティ（従順）...

プラチャー：なるほど、だとすると、ここで「雑」について話すことの意味というのは、現代社会が、完全にその反対に向けて突っ走っているからでしょう。日本だけじゃなくて、実は世界全体に、日本で「雑」といわれているような精神というか、「気」みたいなものをもう一度取り戻していくという流れが起こっているんじゃないでしょうか。それは振り子のような動きなのでないか。それが今、世界中で起こっていると思うんです。皆さんのお話の中で特に感動したのは、江戸時代の話です。それは日本だけでなく、我々アジア人にとっての原点というか、源のような場所です。そこに「雑」の精神を見出すことには、非常に価値があるように思えます。話を聞きながら、振り子のイメージをもったのですが、それは、中国で古代から言われてきた陰と陽の間のバランスのことでと云えるかもしれない。特に今私たちが集っている東京。振り子で言えば、極端に陽の方に振りきってしまっている。東京はそういう場所だと思います。つまり、「雑」からいちばん遠いところへ向かっている。だからと言って、じゃあ今度反対方向に振れてきたときに、「雑」の極致にまでいけばいいかと言えば、そうではないだろう。バランスがそこに必要となる。昨日の会議で中国の発表者が、中国の歴史を辿りながら、現在グローバル経済のただ中で進行しているローカリゼーションの意味について話してくれましたが、そこで私が思ったのは、例えば毛沢東のような人たちが中国の歴史の中でした仕事の意味は何かということなんです。中国があまりに「陰」の方向に行き過ぎているのを、少し戻していくということを毛沢東たちは考えていたんじゃないか。でも、今の中国はどうでしょう。わたしの考え方が正しいかどうかはわかりませんが、どうも中国はあまりにも極陽の方向に振れてしまっているのではないか。もしこういう陰と陽の解釈に意味があるとすれば、個人にとっても社会にとっても、そのバランスを保つということは極めて重要であり、しかし、とても難しいわけです。そして、「雑」という言葉に注目することで、皆さんはこのバランスについて考えていらっしゃるのだと思います。

わたしが今世界のあちこちで「マインドフルネス」ということを教えているのですが、マインドフルとは、まさにその陽と陰、グローバルとローカルのバランスをいかにとるか、ということであり、このことこそが今の世界で大事になっている、というのがわたしの考えです。現代世界を見回してみれば、誰よりもマインドフルであることを必要としているはずの大統領や首相たちは、どう考えても、マインドフルとはかけ離れてしまっている様子です。でも、だからこそ、わたしたちインテレクチュアル（知識人）の役割は重要になっている。知識人の役割とは、マインドフルネスを世界にもたらすことなのではないでしょうか。

